
いざ往かん、第二生徒会

羽賀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いざ往かん、第二生徒会

【Nコード】

N8301G

【作者名】

羽賀

【あらすじ】

人間の器が小さい主人公、御堂は、書記と副会長の幼馴染である会長に手を出そうとしたせいで、生徒会を追い出されてしまう。その屈辱に耐えた彼は、二人の精神に少しでもダメージを与えるため、悪口投書を書きまくるのが主な仕事の『第二生徒会』を発足させる。結構辛辣な後輩と会話しているうちに、事態は妙な方向に転がりだして……？

「……今日も、暇だな」

「そうですね……非常に、暇ですね」

開けっ放しにしてある窓からは、練習中の運動部の掛け声、ブラバンド部のどこかずれた演奏、何部だろう、呪詛というかお経と
いうか、得体の知れないものを唱えている男の声とかが聞こえてく
る。

そんなフリーダムなBGMに加え、『我が東成高校生徒会をよろ
しくお願いしまーす』などという、耳に入ってくるだけで胸のむか
むかが抑えられない声が聞こえてきやがった！くそ、くそっ！

あまりの腹立たしさに、俺は頭を机の角に打ちつける。落ち着け、
そうだ落ち着くんのだ！俺は、クールになるんだああ！

「……なに、してるんです？」

「見ての通り、精神統一さ。あいつらの声を聞くだけで……俺は……
俺はああ……！」

ガンガンガンと断続的に頭を打ちつける。うわあい、なんだか視
界が紅いや。

「ああわかった、要するに悔しくて、寂しいんですね」

「違うわ！　というかどうかという解釈じゃコラ！」

「だって、そうでしょう？　御堂先輩？」

机を挟んで俺の向かい側に座るどこと無くほんわりした雰囲気
を匂わせる美少女、そして我が後輩でもある美水は、俺を見てにつこ
り微笑んだ。く、そんな目で見たら勘違いしちゃうじゃないか！

「悪いな美水……俺には心に決めた女がいる……。君の序列は俺の
中で二番以降にしか成りえないが、それでも君が俺を愛してくれる
なら——」

「誰もそんなことは言ってますし、先輩が嘘を言っているのはわ
かります」

「ひどいわっ！」

「だって、女好きがたたつて……生徒会を追いつ出されたんじゃないですか。結局誰一人としてその手中に収めることなく、書記の沼口先輩や、副会長の竹元先輩ばかりが女子の人気を攫つて行く……。それに耐え切れなくなつた先輩はある賭けを持ち出して」

「ああああああ！ やめてくれええええええええ！ 美水、やめてくれええええええええ！」

それが真実でした。改めて突きつけられた残酷な真実に、俺の心は崩壊寸前。畜生泣くぞ。

「どうぞ勝手に」

「うわ人の心読みやがった」

「先輩が単純すぎるだけですよ、多分」

先輩に向かってずいぶんと失礼な口を利く後輩に文句を言いつつ、俺は窓の外に見える憎き東成高校生徒会の奴らを睨んでいた。あーあ、念を込めた視線なら人を殺せはしなくとも、二週間くらい寝込ませることが出来ればいいのに。

「じゃあ間違はなく先輩は死んでますね。女子の評価、軒並み低い」

「だからあんたは何で人の心読むのっ!？」

「伊達に相棒やつてません」

「相棒なのっ!？」

「まあひどい。先輩が、『頼む美水、俺に力を貸してくれ』と土下座して、拳言いつけどおり上履きを舐めたから、こうして私が着てきたのに」

「そうでしたすみません」

俺は元東成高校生徒会の一員だった。そして美水も。俺は生徒会を追い出されるとき、一つの野心を胸に秘めていた。だが、それは俺一人だけじゃ絶対に成し遂げられない計画だったのだ。だから俺は、恥を偲んで、当時一番仲の良かった生徒会役員でもある美水を

スカウトしたのだ。

そしてその計画は、実行され、今に至る！　そう、その名は――

「……東成高校第二生徒会。実質愛好会みたいな認識をされてますけどね」

「お前モノログ読むの趣味？」

「さあ、何のことですか？」

まあいい。俺は美水のことは一旦無視して、この第二生徒会に思いを馳せた。

第二生徒会。それは、俺を捨てた生徒会の奴らに徹底的に復讐する為に作った、俺の、俺による、俺のための特別機関だ！

活動内容はごく単純、生徒会に対する文句とか批判を書いて、投書箱にインするだけ！

『副会長の竹元君は洗ってない犬の臭いがします』とか、『書記の沼口の字は異世界言語ですか』とか、そういう、奴らの精神に多大なダメージを与えるために俺が編み出した合理的かつ効率的な復讐方法なのさ！

「……暗いですね先輩」

「黙れ黙れ黙れえい！　世間がそう望むなら、俺はいくらでも悪役を演じて見せる！」

「……ていうか、反論の余地なく悪役ですよ先輩」

「……そうか」

「はい」

力強く頷いてくれた相棒の姿に、俺はちょっと視界が潤んだ気が否めなかった。

「でもさー、仕方ないじゃん。あいつらむかつくんだもん」

「それは……そうですね……、先輩が会長に手を出そうとするのがいけないんじゃないですか？」

会長の羽佐間（みづは）は、竹元と沼口の幼馴染だという。どこぞの馬の骨とも知れぬ俺が、幼馴染に手を出すのが許せなかったのだろっ。ふん、人間としての器が小さい奴らだぜ。

「というかですよ？ 第二生徒会を名乗るくらいなんですから、そろそろ悪口投書以外の行動を起こしたらどうですか？」

「例えば？」

「……新しい仲間を募るとか……生徒からの要望にこたえるとか……色々あるでしょう」

「そうか、じゃあ新しい人員を募るために、ポスター作ろうぜ！」
そして構想三分、ポスターは完成した！

『来たれ、東成高校第二生徒会！　　竹元や沼口が嫌いなみんな、一緒に愚痴ろうぜ！』

「……」

「どうだ美水、渾身の出来だぜ！ 俺の美術評定5の才能を生かし、竹元と沼口の似顔絵入りだ！」

「……む、無駄に劇画チックで、何故か巧い………って、これじゃあどう考えてもダメでしょう！ ポスターを貼る許可を下ろすのは、生徒会なんですよ！？」

「え？ 勝手に張るんじゃないのかよ」

「翌日には剥がされてますよ。皆さん真面目ですから」

くそつたれめ！ 何でこういうところだけ真面目なんだウチの生徒会！

「くそつ、俺の頭じゃこれ以上思いつかねえ……！ 美水、何か案は！？」

「例えば………こんなのはとうですか？」

『来たれ、東成高校第二生徒会！　　我が校を根本から改革しよう！　そんな気概のある人募集中！』

「おおすごい！ ……が、別に俺はこの学校を変えるつもりとかないけど？」

「方便ですよ方便。といつても、すぐにそう言つてられなくなりま
すけどね」

「どういう意味だよ」

「知らないんですか？ これ見てください」

そう言つて、美水が机の上に広げたのは様々な文字で、様々な意
見が書かれた紙……紙？

「これ全て、第二生徒会、つまり我々に向けて投書されたものです。
読んでみてください」

「ああ」

『御堂、あえて強きに逆らうお前の心意気に感動したぜ！』『正直、
今の生徒会は厳しすぎます！ 御堂さんがあの生徒会を変えてくだ
さい！』『美水さん結婚してください』『いいか、倒すのは竹元と
沼口だけでいい！ 羽佐間さんに危害加えたら殺す』『竹元と沼口
のヤロー、表では良いカツコしいけどな、裏では俺達からカツア
ゲするような卑劣なやつなんだよ！ 倒せ、御堂！』『チヨシく
れてるあいつらの鼻っ面折ってくれるなら、俺たち婆亜鎖亜禍亜図
も協力するぜ』『あいつらの暴力行為は目に余る』『私たち、逆ら
えばどうなるかわかつてるよなと脅されて、コスプレさせられまし
た！』『あんな外道に僕らのアイドル羽佐間きゅんを渡すわけには
いかないだろ、同胞！』

「こ、これは……！」

「御堂先輩と同じように、あの二人に反感を持っている人は多いん
です。けど、我が校は生徒会に力を与えすぎているせいで、彼らに
逆らえばどうなるかわかったものじゃない……。そんな折、立ち上
がったのが先輩なんです。皆が期待するのも、無理はないでしょう
？」

「……あいつら、影でそんなことしてやがったのか……！」

「ええ。かく言う私も……あの人たちから目をつけられてしまいま

して」

「何だと？　それで、何もされなかったのか？」

「はい、ですが怖かったのは確かです……」

二人に何を言われたのかは知れないが、美水が肩を抱いて瞳を閉じた。体も、ちよつと震えているようだ。

俺は今まで、こんな風に何かに怯えたような彼女の姿を見たことがない。

……くそ、許せない！　許せないぞ口臭がきつい沼口に洗ってない犬の臭いがする竹元おおおおお！

「美水！」

「はい」

「俺は断固として戦うぜ！　やつら、竹元と沼口の横暴から、この東成高校を救って見せる！　悪口投書とかはもうやめだ！　徹底抗戦、これしかない！」

「先輩……」

「美水。着いて来てくれるか……？」

「勿論です……。先輩から誘われた時、ホントはすごく……嬉しかったんですから」

こうして。夕日が差し込む部屋の中、俺と美水は、憎き生徒会と戦うことを決めた。

「あれ？　俺がお前の上履き舐めたのって、むっちゃ意味くない？」

「あれ、私の趣味です」

「先行き恐ろしっ！」

（後書き）

ほぼ構想五分、プロットなしでどこまで物語を広げられるか挑戦してみました。微妙なところですね。

正直この引きでも、完結といわれれば完結のような気がします。が…
…どうなんだろう。

追伸

続き書くことにしました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8301g/>

いざ往かん、第二生徒会

2010年10月8日14時35分発行